



## 児童期に発症した精神分裂病に関する臨床的研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 浜松医科大学 公開日: 2014-10-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松本, 英夫 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10271/903">http://hdl.handle.net/10271/903</a>

学位論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

学位記番号	医博第 50号	学位授与年月日	昭和62年 3月26日
氏名	松本英夫		
論文題目	児童期に発症した精神分裂病に関する臨床的研究		

## 論文の内容の要旨

15歳以下の患者のなかで、DSM-IIIにもとずいて精神分裂病と診断された男子10名、女子9名、計19名の精神分裂病児を対象にして、その特徴について検討した。

1. ロールシャッハテストのM+FMにより2群に分類され、その平均値よりも下回る群をFlat type (F群)、上回る群をUnstable type (U群)とした。そして2群間で差が認められた。
2. F、U、N群(コントロール群)のロールシャッハテストを比較、検討した結果、F群ではエネルギーに乏しく、意欲・活動性が低下し観念内容の幅も狭く、現実吟味能力も低く外界に対する反応性も低下しており、全体的に平板化しているという特徴を持っていた。一方U群においては、エネルギー、意欲・活動性、観念内容の広がりなどに関してはそれ程障害されていないものの、現実吟味能力が低下し、非現実的な認知をしやすく、また感情統制が悪いという特徴を持っていた。
3. F、U群の臨床像としては、F群の症例は潜伏性の発症が多く、初期の中心症状は、F群では行動異常や性格変化が中心である症例が多かった。U群の症例は急性発症が多く、初期の中心症状は幻覚・妄想であることが多く、対人的距離がとりにくく感情統制が悪い症例が多かった。
4. その後の経過、および青年後期以後発症例の破瓜型・妄想型分裂病とのロールシャッハテスト、臨床像との比較により、F群は破瓜型分裂病に極めて類似している群であることが判明した。一方U群は幻聴内容の不鮮明さ、妄想内容の非体系化、過敏で感情統制が悪い症例が多い、ロールシャッハテスト上自我機能の低下がより少ないなどの点で妄想型分裂病と相異なつた群であることが想定された。

このようなことから、F群とU群が児童期に発症した分裂病の両極の性質を備えている群であることが示唆された。

## 論文審査の結果の要旨

児童期に果たして精神分裂病が発症しうるかは、自閉症との鑑別が可能かと言う問題との関連から、長年未解決の問題であったが、1980年に発表されたDSM-IIIによって精神分裂病の診断基準が確立された結果、自閉症は言語および認知面での障害を中心とした発達障害で、精神分裂病とは明確に区別されるに至った。その結果、児童期にも精神分裂病が発症しうるとは確認されたものの、その歴史が浅いため、児童期発症の精神分裂病は単に成人分裂病の若年発症例なのか、児童期の固有の分裂病があるのかについては、未だ統一見解が得られていないのが現状である。

この点を明らかにするために、申請者は浜松医科大学精神神経科を受診した15歳以下の精神分裂病の疑われた患者について、(1)DSM-IIIと言う統一された診断基準を用いる、(2)ロールシャッハテストと言う客観的な指標を用いて患者を分類する、(3)児童期発症の精神分裂病と成人分裂病とを比較する、と言う方法を用いて児童期発症の精神分裂病の固有性の有無を研究し、以下の如き結果を得た。

- 1) 浜松医科大学精神神経科を受診した15歳以下の患児でDSM-IIIによって精神分裂病と診断された患者は男子8名、女子11名の計19名であった。
- 2) 発症年齢は9歳7か月から15歳11か月であった。
- 3) 発症後1年以内にロールシャッハテストを施行し、ロールシャッハテストの指標の中でも特に人格の中枢を示すM(人間運動反応)とFM(動物運動反応)の和(M+FM)について、対象群の平均値より上回るU群(unstable type)と下回るF群(flat type)の2群に分け、健常児10名をN群(対照群)とした上で、成人分裂病の破瓜型分裂病(H群)と妄想型分裂病(P群)と比較したところ、以下の如き興味ある知見が得られた。
- 4) F群は10名(男児4名・女児6名)、U群は9名(男児4名・女児5名)であった。
- 5) 両群の発症年齢、家族構成、遺伝負因、病前性格、学業成績、に有意差はなかった。
- 6) 出産時異常はF群に多かった。

7) F群では全例おとなしく一人遊びが多いのに対して、U群では活発で集団の中でよく遊ぶ児が多かった。

8) 学業成績は中等度以上が多いが、第一反抗期を持つ者は少なかった。

9) 発症は、U群では急性発症が、F群では不登校・奇異な行動などの前駆症状が長年余に及んだ後の潜伏性発症が多かった。

10) ロールシャッハテストの結果は、F群では精神内界の活動性に乏しく、意欲・活動性が低下し観念内容の幅も狭く、現実吟味能力も低く外界に対する反応性も低下しており、全体的に平板化している特徴があるのに対して、U群では精神内界の活動性・意欲、観念内容の広がりなどはそれ程障害されていないものの、現実吟味能力が低下し、非現実的な認知をし易く、感情統制が悪いと言う特徴を持っている。

11) 発症時の中心症状は、F群では行動異常・性格変化が中心であったのに対し、U群では幻覚・妄想が中心で対人関係で易刺激的な症例が多かった。

12) 3～4年の経過で、F群は陰性症状や人格荒廃が徐々に進行するのに対して、U群では過敏・易刺激的で対人関係に問題を持つ傾向がみられた。

13) 青年期以後発症分裂病との比較では、F群は破瓜型分裂病に類似しているのに対して、U群は当初妄想型分裂病に類似すると思われたが、ロールシャッハテストの(M+FM)以外の指標の検討や臨床像の研究の結果、後者は様相を異にする面を持ち、将来果たして妄想型に発展するか否か今後の追跡研究を要する特異な群であることが判明した。

〔本論文の評価〕

申請者からのロールシャッハテストの実施方法、被検者の反応パターンとその精神医学的解釈についての解説の後、申請者との質疑応答を通して、以下の評価すべき点が明らかとなった。

1) 児童期発症の精神分裂病は稀であるため多数例の研究は困難である。

2) F群は破瓜型分裂病に類似するものの、U群は妄想型とは異質の児童期に特異な群であることが判明し、将来の追跡調査の必要性を強く示唆する。

3) 成人分裂病の諸型の発生機序に関する新たな研究の糸口が得られた。

以上のことから本論文は医学博士の学位を授与するに十分な内容であると全員一致で判定した。

論文審査担当者	主査	教授	植村	研一			
	副査	教授	五十嵐	良雄	副査	教授	大原 健士郎
	副査	教授	西村	顕治	副査	教授	南方 陽